



第1会場●2F第4研修室

■司 会／小倉 史朗 熊本県生涯学習推進センター 社会教育主事
本村 信幸 長崎市社会福祉協議会地域福祉課

分科会の進め方

10:45 ~ 10:50

1 都市と地方を結ぶ若者の新しい生き方「緑のふるさと協力隊」 10:50 ~ 11:20

野崎智恵子（福岡県築上町） 築城町役場住民課健康増進係 保健師

「緑のふるさと協力隊」事業とは何か？隊員は集落に一人暮らしをし、近所付き合いを含めて地方を丸ごと体験する。期間は1年、生活費は月に5万円。発表者は土を起こし、種をまき、自分の野菜を育て、地域の祭りやイベントに参加し、共に食べ、共に汗し、共に語った。発表者の派遣期間は終わったがそのまま築上町に残った。農業を知らない都会の若者がなぜ田舎に残ったのか？「緑のふるさと協力隊」は若者の生き方を変えることが出来るのか？

2 「ブックファースト」から「ブックセカンド」へ—就学前に絵本に会うために— 11:25 ~ 11:55

勝部美枝（鳥取県大山町） 大山町教育委員会幼児教育課 司書

6ヶ月の乳児が絵本と出会う「ブックファースト」事業のフォローアップとして、3歳児に絵本を手渡す「ブックセカンド」事業を構想した。図書館・福祉保健課とタイアップした子育て支援・読書推進事業で、文科省の実践研究補助事業「読む・調べる」習慣の形成を念頭においた実践でもある。幼児教育課として管轄する保育所の読書環境整備や家庭への読み聞かせ提唱など、就学前の読書推進に重点をおいている。

3 熟年期の「クラブ活動」勧誘プログラム—「団塊の世代よ集まれ」事業の目的と方法— 12:00 ~ 12:30

田中隆子（山口県下関市）「高齢社会をよくする下関女性の会（ホーモイ）」 代表
竹本篤史（山口県下関市） 下関市社会福祉協議会

下関市社会福祉協議会と「高齢社会をよくする下関女性の会」の共催事業である。熟年者が退職を機に「会社人間」から「地域人間」に移行できないという問題を重視し、地域参加の契機として既存の各種団体に呼びかけ、大学での「クラブ活動勧誘方式」を応用した大会を2年継続して来た。まずは、関係者・関係機関の交流が深まり、それぞれの興味・関心・プログラム創造への問題意識などが大きく変わった。



第2会場●2F 自由研修室

■司 会／石井 睦基 大分県教育庁生涯学習課 社会教育主事
葛山 克司 鳥取県教育委員会事務局 家庭地域教育課 社会教育主事

分科会の進め方

10:45 ~ 10:50

1 町で学び、町で生かす：総合的学習とまちづくり—学校は地域の中へ、地域は学校の中へ— 10:50 ~ 11:20

緒方友希（熊本県宇城市小川町） 宇城市立小川小学校 教諭

自治公民館活動の盛んな土地柄を生かし、平成17年度から、学校が地域と連携し、「ふるさと小川を愛する子ども」の育成を目指して、学校は総合的な学習時間を中心に、まちづくりを課題の柱に、地域は“商店街の活性化”を目標に、学校、商工会、PTAを中心に地域の人材を巻き込んだ「町でかがやく小川っ子」をテーマに様々なプログラムを展開している。

2 「天山自然塾」

11:25 ~ 11:55

小森喜紹（佐賀県小城市） NPO 法人「天山ものづくり塾」 理事長

ものづくりを通じて「創」、「食」、「遊」の3種の体験を親子に届けたいと2004年から開講した。小城市教育委員会の協力を得て、会場に休校中の「分校」を活用し、自然、親子、共同作業などをキーワードにしている。活動期間は7月～12月の月1回、第3土曜日。講座で製作した染色、陶芸などの様々な作品は、美術館や公民館などで発表している。

3 ひこさん「山伏塾」の体験プログラムの内容と構成—長期移動キャンプの実践をとおして— 12:00 ~ 12:30

井関浩久（福岡県） 福岡県立英彦山青年の家 主任社会教育主事

H14年の開始時は4泊5日、現在は9泊10日に延長した夏季休業中の長期キャンプ。自然の中の共同生活をとおして、「耐性」、「自立性」、「協調性」を育成し、合わせて「郷土文化の体験」や「就業体験」を行い、郷土への思いを深めさせ、働くことの意義を理解させることを目的としている。徒歩での移動を柱にプログラム構成を行い、青年の家に所属する学習ボランティア「やまびこ」と協力して展開している。



第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／常岡 敏行 山口県下関市立神田小学校 教諭
飛永 哲男 福岡県福岡教育事務所社会教育室 主任社会教育主事

分科会の進め方

10:45 ~ 10:50

1 『こんにちは 赤ちゃん』-青少年と0歳児のふれあい・交流体験プログラムの意味- 10:50 ~ 11:20

伊藤ひろえ (鳥取県米子市) 『こんにちは 赤ちゃん』実行委員会

県立赤崎高校が実践した「生徒と保育園児の継続的なふれあい」授業が、全国の小・中・高生にも体験できるよう、米子市内の青少年と0歳児及びその保護者とのふれあい・交流の場を創設した。鳥取大学医学部・米子市児童文化センターの協力を得ながら、青少年には、「いのちへの畏敬」、「親への感謝」、「役立ち感」をはぐくむ一助に、また、赤ちゃんには「安心感」、保護者には、子育ての励みとなれればと願っている。

2 「今、音楽にもとめられているもの」 -参加型コンサートの生涯学習実践- 11:25 ~ 11:55

西川桂子 (広島県呉市) JuJu ミュージック パーカッションスト

2005年のチャリティ・コンサートが出発点。以後春から秋を中心に月1~4回のコンサート企画。自らの演奏を中心に様々な音楽活動を展開、時には家族と、時には仲間と、場所を選ばず、対象を限定せず、参加型のコンサートは音楽を人々の日常の中に「移植」して行く。落語や紙芝居と同じく音楽を引っさげて個人が生涯学習の地平を切り拓く時代が来ている。

3 「学楽多塾」-はさま地域放課後子ども教室-NPO未来クラブの「多様性」への挑戦- 12:00 ~ 12:30

黒田美保 (大分県由布市挾間町) はさま地域放課後子ども教室 コーディネーター

平成16年度から子ども教室の運営はNPO未来クラブが受託し由布市と協働で行なっている。プログラムも実施形態も多様である。例えば、活動は、「創作体感作戦室」、「食文化体験作戦室」、「自然体感作戦室」、「音楽体感作戦室」、「頭脳向上作戦室」、「ボランティア作戦室」などと続く。拠点は2か所であるが、遠い学校への「出前」も行い、プログラムを提供し、指導員を巻き込んで、既存の「児童クラブ」との連携も行っている。長期休業中もほぼ毎日開催。平成19年度から「放課後子どもプラン」に変更し、現在に至る。



第4会場●4F 大研修室

■司 会/糸井 茂 福岡県北筑後教育事務所社会教育室 主任社会教育主事
中村由利江 ゆめなか@情報局

分科会の進め方

10:45 ~ 10:50

1 「わくわく土曜塾」-公民館利用グループを中核とした「ボランティア村」の子育て支援- 10:50 ~ 11:20

林 義高 (山口県長門市) 中央公民館内 「事業企画運営委員会」 委員長

H18年から開設。子育て支援も、学校週5日制対応も含んだ、通年、全土曜日を網羅した子どもの活動プログラムである。拠点は中央公民館、指導者は公民館を利用している各種グループから選出された「ボランティア村」のメンバーである。64種類の講座を通して、安心・安全の確保、規範意識の形成、女性支援・子育て支援、学校教育の補完などを目指している。公民館と住民指導者の「協働」事業であり、指導する側の「活力」を創造する隠れたカリキュラムになっている。

2 障害者の社会参加と地域交流ネットワークの創造 11:25 ~ 11:55

高木春未 (鳥取県境港市) 社会福祉法人まつぼっくり 施設長

小規模授産施設としてH10年に建物を建設。障害者が清掃や塩の袋詰めなど軽作業を営みつつ自立と社会参加の道を探りながら、合わせて、地域との交流を促進できるようバザーや太鼓の演奏を通して地域行事にも積極的に参加し、交流と連携を促進している。

3 学校と地域の連携による生涯学習の推進「校区公民館制度」-まちづくりは校区コミュニティから- 12:00 ~ 12:30

有村博文 (鹿児島市) 鹿児島市教育委員会生涯学習課 指導主事

S48年以来培った「校区社会教育委員制度」の成果と反省を生かして、79の小校区の全てに関係機関・団体の代表者を網羅した「校区公民館運営協議会」を設置し、校区の特徴と実情に即した事業を企画、実施している。近年は、全校区が一斉に、それぞれの校区の自尊意識の向上を目指した「わがまち自慢スローガン」を決定し、「わがまち自慢づくり支援事業」、引き続き「わがまち自慢づくり推進事業」を展開している。生涯学習、青少年の健全育成、コミュニティの形成が基本視点である。



第1会場●2F第4研修室

■司 会／倉員 武夫 福岡県南筑後教育事務所社会教育室 主任社会教育主事
佐々木眞由美 生涯学習インストラクターの会「クリエイトさが」事務局長

分科会の進め方

13:30～13:35

1 家庭の教育機能を高めるための支援の在り方に関する研究—市町村における行政支援の視点から— 13:35～14:05

池本 要 (宮崎県宮崎市) 家庭・青少年問題研究所 主宰

研究は、家庭教育に関する基本的概念、家庭教育をめぐる今日的課題、今後の家庭教育の支援の在り方などを中心に行い、結論は、全ての親を対象にした支援対策が必要であることを確認した。その上で、親になる前からの学習の必要、行政部局間の横断的・総合的な施策、行政と民間団体との連携・協働、「開かれた学校」の更なる推進、家庭教育アドバイザーの養成と配置の必要などを提言した。

2 NPOを中核とした学社連携、社福連携による子育て支援事業の複合課題 14:10～14:40

帯刀里美 (大分県杵築市山香町) NPO 法人子どもサポート「にっこにこ」社員

平成17年度の公民館学校「トトロの森の夏休み」からスタート。参加した老人クラブ、女性団体、民生委員、退職教職員の会などのメンバーが集って、H.18年NPOを結成。現在は学校施設の開放も可能となり、退職教員を中心とした「宿題サポート」も導入、多様な体験プログラムを展開している。最大の問題は“合併”。拡大した自治体がサービスレベルの平等をうたい文句に旧町の独自事業の支援を認めないという事実上のサービス低下。NPOが力を付けて乗り切れない。

ティータイム

14:40～15:05

3 小学校児童クラブへの「発達支援プログラム」導入の波及効果—「井関夏休み元気塾」の挑戦 15:05～15:35

野村聡美 (山口県) 山口県地域寺子屋推進ゼミナール「井関夏休み元気塾」副塾長
上野敦子 (山口県) 井関小児童クラブ 指導員

井関小児童クラブには「保育」は存在しても、「教育」は存在しなかった。塾長ほかの関係者が山口県生涯学習推進センターでの研修成果を導入して「元気塾」を開設した。種々の障害を突破して、学校施設の利用許可が拡大し、地域の協力者が集合し、行政の発想が変わり、保護者の感謝が集まり、何よりも子どもが変わって、児童クラブの活動内容が激変した。

4 学校へ行政職員を配置した「教育支援コーディネーター制度」に関する実践報告— 15:40～16:10

加藤雄二 (島根県雲南市) 出雲市役所政策企画部政策推進課 (元教育支援コーディネーター) 他

教育支援コーディネーターの配置の目的は、学校と市内にある教育資源「ヒト、モノ、コト」、学校と教育委員会、学校と学校など、学校を中心としたあらゆる連携を深め、そのことによって、各種教育課題の解決を図るものである。平成18年度から2年間、一般行政職員が学校に入って実践した事例を報告する。実践事例としては、「小中学生のための市民バス乗車券制度設立」、「中学生の修学旅行等での物産販売」、「キャリア教育プログラムの策定」など。



第2会場●2F 自由研修室

司 会／石井圭一郎 大分県教育庁生涯学習課 社会教育主事
西山香代子 山口ネットワークエコー 代表

分科会の進め方

13:30 ~ 13:35

1 官民協働の「総合型」子育て支援システムの発想と展開ー通常支援・病後支援・緊急支援3部門の確立ー 13:35 ~ 14:05

山口ひろみ（佐賀県唐津市） NPO 法人唐津市子育て支援情報センター センター長

H16年センター設立。子育て不安に関する情報・ニーズに対応するため、官と民の協力体制を前提として、窓口を一元化した。事業の運営はNPOが主体となっている。子育ての過程における安心の条件を、「通常支援」、「病後保育支援」、「緊急サポート」に分類し、1つの組織内で上記3分野に対応する事業を発展的に積み上げ、拡充して展開している。

2 『高須ふれあいお月見コンサート』企画・プロセス・成果・展望 14:10 ~ 14:40

八木晶子（広島市高須） 高須文化振興委員会 代表

社会教育主事研修における課題の事業化が出発点。地域の機関、団体、人材の力を総合化できる「高須文化振興委員会」を結成。多世代交流、経費節減の事業企画、地元人材のためのステージの創造、学校との連携、諸団体の協力体制の構築、季節を生かしたバラエティに富んだプログラムの演出を目指して、標記の文化交流事業が実現した。

ティータイム

14:40 ~ 15:05

3 4つの地区公民館ー「失敗から学ぶ」4つの通学合宿ー地域で支える通学合宿ー 15:05 ~ 15:35

熊 元（長崎県長崎市野母崎地区） 長崎市教育委員会野母崎教育センター

事業の主催は野母崎地区内4校区の地区公民館長、共催として小学校長及びそれぞれのPTAである。始まりはH10年の教頭先生と子ども達の非公式合宿。目標は子どもの日常生活の自立。宿泊拠点は地区公民館。役割分担、メニューの決定、買い物、食事の準備、後片付け、洗濯、掃除など、日常の必須作業を全て子どもの手で行う。地域のもらい風呂や送迎ボランティアのお世話になり、あわせて長崎大の学生の支援も仰いでいる。

4 「えびの知っ徳・納得塾」ー市民主催の「行政勉強会」と「地産食材賞味会」ー 15:40 ~ 16:10

本田英俊（宮崎県えびの市） きりしまローズボナーレ 代表

2006年から月1回の市民勉強会と交流会を開設。行政情報の共有と地もと産品の理解と賞味を目的とし、公募、会費制で拠点はえびの市国際交流センター。現会員は市民40名、スタッフ7名。情報の提供者は主として行政職員、議員などで、学習のスタイルはセミナー形式のグループ討議を採用している。塾生の中から新しい活動がスタートしている。



第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／城石 俊弘 福岡県筑豊教育事務所社会教育室 主任社会教育主事
三瓶 晴美 たぶせ雑学大学 代表

分科会の進め方 13:30 ~ 13:35

1 「祭り」の思想を発明する —佐賀市立勸興公民館のまちづくり実験— 13:35 ~ 14:05

秋山千潮 (佐賀市) 佐賀市立勸興公民館 館長

公民館を「祭り」の拠点としました。新しい祭りは、メディアや企業が満たしていない人々の興味と関心を掘り起こし、市民の出番を作るということを意味しています。カギは「非日常性」です。しかも、公民館を拠点とする以上、そこには生涯学習に絡んだ発想が不可欠です。「出し物」も「露天」も従来の発想を捨てなければ、新しい顧客の獲得は出来ないのです。工夫の第1は茶屋です。第2は毎月第2土曜日を「祭り」と決めました。「夜市」は住民の主催です。第4にはこれまで公民館に足の遠かった人々の招待に乗り出しました。にぎわいは恐らくこれまでの公民館では前代未聞です

2 公民館による「定住化」促進プログラムの創造と展開 14:10 ~ 14:40

渡辺 修 (島根県益田市下種町) 地区振興センター長 (種公民館長)

「限界集落」化の危機を察知して、H9年以降「定住化」を目指した公民館活動を推進。「種に定住を進める会」、「種の山菜を食べる会」、「種ふるさとまつり実行委員会」、「種の明日を夢見る会」など活動組織を次々に編成し、宅地の造成、祭りの創造、放課後児童クラブの開催、地場産品の試作など各種の活動を展開して来た。H19年、種小学校が廃校になるに及んでコミュニティ・ハウス、加工場などの活用法を検討中である。

ティータイム 14:40 ~ 15:05

3 すべての子ども達に読書のよこびを—ユニバーサルデザインの視点をふまえた読書活動の推進— 15:05 ~ 15:35

津幡光浩 (熊本県) 熊本県教育庁社会教育課 社会教育主事

熊本県では、平成16年に「熊本県子どもの読書活動推進計画(肥後っ子いきいき読書プラン)」を策定し、子どもの読書活動に取り組んでいる。併せて、平成17年度からは、「障がいのある子ども達の読書活動推進支援事業」にも取り組み、すべての子ども達の読書活動を着実に推進するよう努めている。平成19年度は国の委託事業を受け「特別支援学校」「病院・施設」等で、おはなしボランティアを派遣したおはなし会を実施した。

4 総合型地域スポーツクラブによるコミュニティ活性化戦略—活動から交流へ、交流を地域づくりへ— 15:40 ~ 16:10

岩本とみ代 (大分市) 川添なのはなクラブ マネージャー

H17年からの準備を経て、心身の健康と潤いの有る生活を目標に総合型スポーツクラブを創設。スポーツ教室の実施、スポーツイベントの企画、自治公民館への出前講座、審判・指導者の育成、各種グループ・サークルへの支援など各種スポーツ・文化活動の企画と実践を通して世代間交流を促進し、地域コミュニティの活性化を目指している。



第4会場●4F 大研修室

■司 会／渋谷 秀文 島根県益田市立二川小学校 教諭
下田 明子 佐賀県生涯学習センター 企画副主任

分科会の進め方 13:30 ~ 13:35

1 ^{さとふる}「里浜」づくりによるふるさと創造の実践ー都市化の中の浦添市港川地区自治公民館の挑戦ー 13:35 ~ 14:05

銘苅全郎 (沖縄県浦添市) 港川自治会自治会 会長

『里浜』とは「里山」にちなんだ造語である。『里浜』は身近な海浜の活用を目的として地域活性化の素材のひとつとなっている。港川自治会は豊かな海辺の自然資源を活用して、急激に都市化の進んだ当該地域に自治公民館を中核とした新しいふるさとを創造すべく各種事業を展開している。プログラムは、潮干狩り、海辺の観察会、手づくり追い込み漁網体験・続いて追い込み漁体験、海辺のコンサート、総合的学習の舞台提供など、「参加型」・「顔の見える」自治会活動をテーマに組織の拡大・充実に成功している。

2 地域組織の統合と改変と横断型化ー発想の掘り起こし、アイデアの集中と選択、そして実践へー 14:10 ~ 14:40

西田寛司 (鳥取県三朝町) 三朝町地域振興課 主幹

従来組織の機能重複と制度疲労に着目し、中山間地域活性化を目的とした住民自治組織の統合・改変に着手した。企画から実践までを分野横断的に構想し、住民のアイデアを掘り起こして、世代間交流機会の創造、小集落のサポート、遊休施設の有効活用、燻製産物の試作、米の販売など集落営農から地域営農への転換等選択的に実践に移している。

ティータイム 14:40 ~ 15:05

3 「子育てアップ」チャレンジプランー学社連携による家庭の教育力向上のための実践事業ー 15:05 ~ 15:35

中野又善 (福岡県春日市) 春日市教育委員会社会教育課 課長補佐

学社の連携を鍵として学校教育課と社会教育課が実施事務局を共同設置し、生活習慣向上のための「基本メニュー」及び「チャレンジメニュー」を保護者に提示した。市内12の小学校とそのPTAの協力を得て、選択したメニューに添って、小学校3年生及びその保護者が生活習慣・学習習慣の向上を目指した実践に取り組んだ。保護者の評価を通して家庭における教育実践率は明らかに向上したことが判明している。

4 知的障がい者の挑戦と活動舞台の創造ー年100回公演の瑞宝太鼓が引き出した可能性ー 15:40 ~ 16:10

高倉照一 (長崎県雲仙市瑞穂町) 瑞宝太鼓プレーヤー
岩本友広 同上 瑞宝太鼓プレーヤー・団長

2001年活動開始。知的障害を乗り越え、特技・特性を職業にまで高めるという意識で挑戦を開始し、年間100回の公演活動、20万人の聴衆を獲得するまでに成長した。太鼓を介して自分を打ち立て、職業を打ち立て全国展開を可能にした。希望し、努力し、感謝して生きる彼らには、無限の可能性が広がる。